

階 級 分 析 と 人 口 分 類

杉森 滉一 『人口分類と階級分析：フランスの社会職業分類』
(御茶の水書房,1991年刊,¥4,635) を読む

山 田 満

(『統計学』第64号 [1993年3月刊]、経済統計学会刊行、pp.40-45、に所収)

社会のルプレザンタシオン様式

すくなくとも、1960年代後半以降のフランス語圏の人文・社会科学文献を読むとき、それら文献のなかで戯れている言葉(概念)達のなかでルプレザンタシオン (représentation) という概念(言葉)が特権的な地位と役割を演じていることに気づく。社会は自らをどのようにルプレザンタシオン (*mise en scène*, *Darstellung*) し、自らを形成-構成していくのか。社会のルプレザンタシオン (*Darstellung*) の様式とは、社会形成の様式そのものに他ならない。社会職業分類とは、第二次世界大戦後のフランス社会構成体が、その再編成をめぐる経済的・政治的・イデオロギー的諸闘争のなかで、社会の編成様式の一要素としての社会の表象 (ルプレザンタシオン=*Vorstellung*) 様式として生み出したルプレザンタシオン (*Darstellung*) の一様式に他ならないのである。

フランスの社会職業分類の研究

杉森 滉一 『人口分類と階級分析』は、日本語圏で初めて書物という形態で刊行されるフランス社会職業分類の本格的な研究書である。杉森は、本書を完成させるのにフランスへの研究留学を含め、足掛け8年以上の歳月をかけた。こうした本格的な研究書が刊行されるのは、フランスでもそれほど例がなく、評者の知る限り Éditions La Découverte (同出版社はフランスの左派系出版社の名門 Maspero 出版社の後身である) から1988年に刊行された Alain Desrosières et Laurent Thévenot の著書 *Les catégories socio-professionnelles* があるだけである。

『人口分類と階級分析』の狙い

同書は、フランス社会がその歴史的形成の過程で生み出した人口の社会的存在形態の分類体系である「社会職業分類」の「紹介と解説」を、その歴史的形成過程を社会-歴史科学的に分析することを通して行おうとする試みである。しかし、著者が狙っているのは、それだけではない。同書のタイトルが示しているように、「『社会階級』の分析という問題を、統計学……の分類論の立場から考えること」が同書の「本来的な」狙いなのである。そして、実際、この後者の狙いが同書の論述全体を支配しており、前者の狙いは、この後者の狙いによって限定づけられたものとなっている。本稿では、以下、同書の論述の最も基本的な秩序を再構成し、その論弁上の問題を浮き彫りにすることにしたい。

社会階級から社会階級分類へ

社会階級の分析というが、同書は「社会階級」をどのように把握しているのだろうか。

社会階級は存在である。そして、社会階級 (概念) は存在としての社会階級 (実在) を「歪みなく反映した」概念である。これが、同書の論述を根底において支える前提である。この根本前提から出発して同書は、社会階級を次のように定義している：社会階級 (存在 = 客観的実在) は「社会的富をめぐって常に排反的に利害を異にする、そしてそのために恒常的に、かつある程度以上の規模を以て争いあう人口集団」(同書 p.252. 以下、同書からの引用はページ数のみを表記する) である。この規定は、階

級規定に関して二つの重要な主張を含んでいる。第1に、社会階級を具体的な歴史的・社会的闘争空間に登場する「『戦う』集団」として規定していること、第二に、ある具体的な「戦闘的集団」を社会階級という名の集団にするものは、その社会的闘争を「長期的に、持続的に、かつ大規模に」なものとす恒常的な利害対立であるとしていること、である。ここで、後者の主張に関しては、その根本的利害対立を作り出すものが生産関係において「諸個人が占める位置とそれに淵源する地位」であるという古典的な階級規定が確認されているに過ぎないが、前者に関しては、同書に固有なもう少し立ち入った階級規定が提示されている。生産関係上の位置・地位は階級規定上の基盤であるが、それはある諸個人を具体的な「戦う集団」に結集させる十分な条件とは言えない。経済的、政治的、イデオロギー的諸関係から成る社会的総体が諸個人を「戦う集団」へと結集していく契機となるのであり、社会階級を具体的に規定するにはこれら諸条件の総体を考慮する必要がある。このことは、社会階級を「現象的なもの」として規定することを意味する。ここから、例えば、「職員」の階級規定に関して、「階級帰属を判断する基準は、職員が労働者階級と呼ばれる集団の一員として持続的に活動しているか否かに置かれるべきである。つまり、職員が労働者階級に属するかどうかは理論的抽象的ではなく、具体的にのみ決定されうる。」という主張が可能となる。そして、この「社会階級現象の研究」は、さらに労働力（階級）再生産の場としての家族の階級規定における重要性の認識へとつながり、階級規定において家族の階級帰属が諸個人の階級帰属に対して優先するという主張が成される。

このように、同書によれば、社会階級は、
1) 客観的存在であり、2) 歴史形成力ある戦

う集団として根本的利害を異にした他の社会集団と現実的、具体的に対峙しあい、他と明確に区別されて存在する、3) 個人よりも家族を集団の基礎的構成要素とする社会集団、として規定されるのである。そして、そのような集団として社会階級は人口分類（社会階級分類）の対象となるような集団であると見なされるのである。

社会階級分類から社会職業分類へ

「人口を社会階級に分類することは、統計学（...）の主要な課題のひとつ」であり、それは最終的には社会階級分類の作成につながっている。これが同書の基本的立場である。では、同書は社会階級分類をどのように規定しているのだろうか。それは社会職業分類とどのような関係を持つと考えられているのだろうか。

社会階級分類（概念）は、客観的なものとして人口という存在に刻み込まれている社会集団上の区分である社会階級区分（存在）を「正しく」反映した分類体系である。これが社会階級分類の基本的規定であるが、この規定は同書の根底にある同書に特異な分類体系観に基づいている。「分類体系の本質はその分類体系の対象たる『存在』にあ（る。）」（p.xiv）、「...社会階級などの分類は、目的のいかんをとわず何人も前提せざるをえない真偽判定の可能な分類である。...分類（少なくとも科学的活動としての分類）は存在における区分であり存在の構造の提示なのである。」（p.p.259 260）

それゆえ、「『社会階級』の分析という問題を統計学の分類論の立場から考える」という同書の主要な狙いからフランスの社会職業分類を研究すると言うことは、結局のところ次のことに帰着する。社会職業分類はフランスの社会階級を表わしているのかを、社会階級分類との対応関係において検討すること。

フランスの社会職業分類

こうした観点から、同書は、フランスの社会職業分類とは何か、それは何を表わしているのかを検討していく。同書に基づけば、社会職業分類は、次のような特質を持つ人口の（経済的活動人口だけでなく、非経済活動人口も分類対象に含んでいる）分類である。

1. 社会職業分類は、近代的統一国家成立後に形成される「国民」としての人口の分類様式である。

2. 社会職業分類は、基本的には個人を単位とした分類であるが、同時に世帯主の社会職業分類に基づいた家族を単位としたクラス分けが重視されている。

3. 社会職業分類は、形式的に見れば、日本の「社会経済分類」などと似た性質を持っているが、その分類の本性および方法（基準）は根本的に異なっている。

4. 社会職業分類は社会的識別表象（ある社会的集団を他と区別された社会的集団として観念する表象）を「分類の対象かつ根拠」とした人口の区分（分類）体系である。社会的に支配的な通念（観念体系）によって、従って、社会のなかで社会的主体として活動している「良識」ある人々（「国民」）によって、社会的な同質性 (l'homogénéité) と社会的な近接性 (la ressemblance) に基づいて一つの社会的グループ（集団）を形成していると見なされ、そして多くの場合、社会的に確立したグループ名称を付けられ、かつ、多くの場合、社会的・政治的・経済的立場を代表する装置の下に結集していると観念されている（と分類者が思う）グループを分類項目として立てることによって、人口を余すところなく幾つかの分類項目（社会的集団）に分割＝配分し、人口を様々の社会集団からなる編成体として提示 (représenter) したものが社会職業分類

なのである（ここで、「社会的な同質性」とは、「そのなかで相互に人間関係が保たれ得る、同じような意見と行動の見られる場合の多い、そしてその構成員によってもそこに属すると認められる」（p.20）ということであり、「社会的近接性」とは、経済的諸条件、教育の水準と性格、労働諸条件、文化・余暇活動、政治的・宗教的意見、等に近似性があるということである）。それゆえ、表象を基礎にした区分である社会職業分類は、存在における区分を基にした社会階級分類ではない。

5. 「社会的識別表象」は、全ての社会的表象（観念体系）がそうであるように、階級社会においては、それ自身、階級闘争の賭け金であり、階級的規定性を受けている。社会職業分類が依拠する社会的識別表象についても例外でなく、社会的有力者（支配階級）の表象の影響を強く受けている。

社会職業分類から社会階級分類への通路？

以上のように、同書によれば社会職業分類は社会階級分類ではない。では、社会職業分類と社会階級分類との関係は在るのか。この関係が見つけれなければ、社会階級論の観点から社会職業分類を研究することは単なる非難に終わってしまい、生産的ではないであろう。

先述のように、社会職業分類は社会的識別表象に基づく人口の分類である。こうした性格付けは、社会職業分類に「表象 (représentation)」という認識論上のステータスを与える。ここで「表象」とは、アルチュセールが言うイデオロギーであり、マルクスが「1857年の序説」で科学生産労働に関して立てたテーゼ（科学生産の労働とは、「直観と表象 Anschauung und Vorstellung を概念へと加工する」労働である）で言表した「表象」である。表象は、社会の構成員たちが「社会的環境世界」との関係を社会

の主体として生きる仕方に係わった観念装置であり、客観的実在としての社会的現実を科学的に叙述 = 表現 (Darstellung) するものではない。それにたいし、同書によれば、社会階級は存在 (= 客観的実在) である。

それゆえ、表象としての社会職業分類と存在 (概念) としての社会階級との対置、これが同書が設定する基本的な構図である。従って問題なのは、表象と概念との両項を結び付ける通路を見つけることである。同書は、この結び付けを二つの基本的通路 (問題設定) に基づいて行っている。1) 「表象から概念へ」と向かう認識過程上の通路、と2) 「社会職業分類から社会階級分類へ」という社会学的 (統計学的) 分類論上の通路、である。

表象から概念へ

概念は、表象を素材とし、それを変形 = 加工する (Verarbeitung) ことによって構築される。ここで表象としての社会職業分類は、素材という認識過程上の地位を付与される。表象は、社会的に確立した表象である限り、社会的存在 (社会階級) を「何らかの形で...反映している」(P.250)。これが、表象が概念に加工されうる理由である。それゆえ、科学的認識の過程とは、認識素材としての表象が、どのような形態で存在を反映しているのかを認識する過程でもある。この表象に固有な存在の反映のメカニズムを解明しながら、その「反映の歪曲」を是正していき、「正しい」認識 (概念) へと至るのが、科学的認識の過程である。社会職業分類における、フランスの社会階級的現実の「歪曲的」反映の機構の解明が社会階級的現実の解明へとつながるのである。

社会階級の分析から社会階級分類へ

表象としての社会職業分類から存在 (概念)

としての社会階級へという認識過程上の通路は、実は、社会階級ではなく社会階級分類への通路に置き換えられるという操作によって可能となっている。こうした転移が可能なのは、同書が社会階級を分類可能な存在として定義しているからである。この置き換えによって、社会階級分類を媒介にした両項の結び付きが可能となっているのである。

すべてのゴタゴタがそこに帰着する《反映》の哲学

同書は、その狙いとして社会職業分類の歴史的形成過程の社会科学的分析と社会階級分類論の研究との二つを設定していた。この二つの狙いは同書にあっては二つの研究方法の違いに結び付けられる。社会職業分類を社会的形成物として捉え、それが社会的に形成された過程を分析する「社会的形成論」の研究手法と、社会職業分類が「反映」すべき対象 (諸社会階級) を「正しく」反映しているか否かを検討する「認識批判論」(E. マッハらの「認識批判論」とは無関係) の研究方法との二つである。この二つの研究方法は、さらに日本の社会統計学派の研究戦略上の対立軸の一つである統計学の学問的課題の設定をめぐる対立 (社会科学方法論説と統計的諸実践の社会学説との対立) と結び付けられる。こうした対立の克服を方法的に目指していることも同書の大きな特徴の一つとなっている。

この克服にあたって同書が採用する戦略は、「認識批判論的」研究方法の優位の下に、両者を統一的に理解していくというものである。同書にそのような統一の戦略を可能にしたのは、同書の論述の基礎に横たわっている認識論上の立場であり、その立場は《反映》という哲学上のカテゴリーに支えられている。周知のように、このカテゴリーは二義的な意味作用を持つ

ており、「社会職業分類（認識 表象）は、その認識対象である社会階級（存在 = 実在）を反映する」といった「認識の理論的」な使われ方をされる一方で、「社会職業分類はフランスの社会形成体が歴史的に産み出した社会的形成物（存在）であり、その意味でフランス社会の現実が反映されている」といった社会理論的（《土台 - 上部構造》反映関係説的）な使われ方をされる。同書は、この範疇を使って、「社会職業分類は第一に、社会的客観的実在を「正しく」反映しているかどうかに従って認識の理論的に評価されなくてはならないが、それが存在を「正しく」反映していないとしたら、その原因は「社会形成論的」に探られなければならない」という立場を打ち出しているのである。

評価：社会職業分類の階級分析へ

以上、同書の論述の基本的構成を再構成してきたが、そこには幾つかの問題が含まれているように思われる。以下、そのうち主要なものにコメントを加えることで、同書の評価に代えることにしたい。

第一の問題は、同書においては、社会階級が存在（実在）であるということが独断的に主張されており、問われないということである。しかし、「社会階級が存在である」という言表は、ひとつの特定の社会認識に基づくひとつのテーゼであり、問われない《真理》ではない。どのような認識実践も一連のテーゼの組み合わせによって表現される認識生産の諸条件によって物質的に条件づけられており、これら諸条件を明確に認識し、自らの実践の限界を把握することが「批判的」認識実践の条件である。自らの認識実践に「批判的」でないことは、悪しき意味での独断論に後退する恐れがある。

さらに、同書において問題なのは、「社会階級が存在である」というテーゼが「全ての存在

（社会的実在）は社会階級的である」というテーゼに安易に横滑りしてしまう傾向があるということである。社会階級は存在であるとしても、存在には社会階級的以外の存在（社会職業分類は、この「他の存在」を反映しているのかもしれない）が在るかもしれない（存在の複合性の問題）。だとすれば、社会階級的構造と社会階級的以外の諸構造との関係の問題が立てられなければならない。同書は、存在の複合性の問題を社会階級的構造の複合性の問題として設定しているのかもしれないが、この点は明確でない。

第二に、社会職業分類は支配的な社会的表象に基づく分類であり、それゆえ存在に基づく分類である社会階級分類ではない、というのが同書の基本的主張であるが、全ての存在は記号表現されることによるのみ現前するのだとしたら、社会階級（分類）も表象としてしか自らを現前しえない。同書は、社会階級（分類）は概念であると言うかもしれないが、だとしたら、「概念は社会的表象になったときにのみ社会的力を持つ」という認識が同書には欠落しているということになる。むしろ、人口の分類を、主に、社会が社会的集団を形成していると見なすものを分類単位として識別し、立てることに基づいて行おうとする社会職業分類作成者の立場のほうが、それはそれなりに一貫しており、社会職業分類を人口の分類体系として有意義なものとしているのではないだろうか。

第三に、同書は社会階級を社会集団として規定しているが（それゆえ社会階級分類を作成することが可能である）、これは同書の見解（＝立場）からみても問題がある。例えば、同書は、「階級帰属を判断する基準は、.....理論的抽象的ではなく、具体的にのみ決定される。したがってそれは国によってまた時代によって異なりうる」と述べ、具体例として職員の階級

帰属を取り上げ、「アメリカでは...自身でべつに階級を構成していない」と書いている(p.255)。さらに、消費者団体、遺族会、農業団体などの「圧力団体」に関しては、「利害状況に応じて、階級連合的あるいは階級横断的に成立するものもありうる」(p.252)と述べている。このことは、諸社会階級は歴史形成力を持つ社会勢力であり、社会的集団を形成しているとしても、全ての社会集団が直ちに社会階級的であるわけではないし、すべての個人が明確にある社会階級に属しているというわけでもないということを含意しているのではないだろうか。

社会階級は、歴史的な社会的諸闘争が社会職業分類によって示されるような既存の社会的諸集団を解体したり、あるいは逆に様々な団体、個人を歴史形成力ある社会集団へと結集したりしながら、社会的空間に歴史的勢力として形成し、現前させるところの、流動的な、時には高度に組織化された大衆・群衆・団体なのであって、社会階級分類が想定しているような明確な、安定的な境界区分によって分割された集団ではないのである。従って、人口(ないし経済的活動人口)を一定の分類基準に基づいて余すことなく諸階級に配分・区分する社会階級分類を作れると考えるのは根本的に間違っているのである(従って、階級構成表などありえない)。

そして、ここで最後に、同書の論述の根底を支えている方法論上の立場である《反映論の論理学》が問題として浮上してくる。《反映論》の論理学は、《反映されるもの》(社会階級・社会階級分類)が《反映するもの》(社会職業分類)に先立って既に在ること(識られていること)を前提にして組み立てられており、そのことによって認識作用の諸条件(社会作用の諸条件)の存在を忘却させ、認識作用(社会作

用)の生産装置の物質性を抑圧し、認識実践を独断論の閉域に閉じ込めてしまうという働きをもっているからである。実際、この作用は、同書の論述のいたるところに見られ、社会階級を存在として規定し、表象として規定される社会職業分類に対置するという同書の基本的な論述構造は、この論理学によって支えられていることは間違いないのである。

このような問題点を指摘してきたとき、最後に本稿が同書に望みたいことは、その研究プロジェクトにおいて《反映論》の問題設定を放棄し、社会職業分類という社会的に制度化された表象体系を、それを産み出した社会的・歴史的諸条件の総体のなかで把握していくという同書が様々な問題を抱えつつも手がけ始めた作業を徹底して欲しいということである。同書も述べているように、そのためには「近・現代のフランス社会・政治・経済史の全体に通暁し、フランス社会の構造を全体として把握する」(p.39)という作業が必要になるであろう。同書は、そうした作業を行うことは「無謀」であり、「我々が目指すのは、CS体系の成り立ちの解明に役立つ限りにおいて、これらをいわば垣間見ることである」(p.39)としているが、社会職業分類の形成とその利用の歴史を、そうした研究プロジェクトのなかで研究することが、むしろフランスの社会形成を巡る階級的諸関係の根底的理解をもたらし、そのことによって社会職業分類の批判的理解を深め、その批判的利用に道を開くように本稿には思われるからである。同書は、少なくとも、その一步を確実に踏み出しているのである。

(1993年2月19日)